

地名のいわれ

平成22年9月

佐野市産業文化部観光立市推進室

はじめに

佐野市は佐野市総合計画中期基本計画において、「観光立市の推進」を※リーディングプロジェクトと位置づけました。

「観光立市の推進」のためには、地元への理解と愛着が基本となります。

そのため、平成22年2月に、町会のご協力を得て「町会のお宝・自慢調査」を行いました。その際、町会名のいわれもお聞きしたところでした。

この冊子は、町会から聞き取りした内容に、各種資料から地区名などのいわれも参考にまとめてものです。なお、できる限り多くの資料を調べましたが、一部の町会名のいわれは不明としたものもあります。ご容赦願いたいと存じます。

地名のいわれについては、いろいろな説があることもわかりました。どの説が正しい、間違っているということではなく、読み物として楽しく読んでいただければ幸いです。

※リーディングプロジェクト

本市のまちづくりを推進するにあたり、特に重要でかつ先導的な役割を持つ
施策横断的な取組

目 次

1. 地区名など

佐野、安蘇、田沼、葛生	1
旗川、吾妻、界、旧三好村、旧野上村、旧新合村、旧常盤村	2

2. 町会名〈五十音順〉

相生町(葛生、佐野) ～ 浅沼町	3
朝日町 ～ 伊勢山町	4
犬伏上町、犬伏下町、犬伏新町、犬伏新町 ～ 植上町	5
植下町 ～ 柿平	6
片倉 ～ 上作原	7
上仙波 ～ 亀井町	8
瓦町 ～ 黒袴町	9
越名町 ～ 下彦間下、下彦間上	10
下牧 ～ 高萩町	11
高橋町 ～ 天明町	12
栃本上、栃本下 ～ 中	13
中仙波 ～ 奈良渕町	14
西浦町 ～ 富士町(上、下)	15
富士見町 ～ 堀米町 (安良町上、安良町下、内堀米、菊川、七区、朱雀、横手)	16
本町(葛生) ～ 村上町	17
免鳥町(市街道、新田、免鳥) ～ 山越	18
山菅 ～ 若松町(城西、城東、城南)	19
若松町(第一協和会) ・ 若宮上町、若宮下町 ・ 【参考文献等】	20

1. 地区名など

【佐野】

佐野の地名のいわれは、いくつかの説があります。(佐野町郷土誌など)

①左野説

奈良時代(8世紀頃)に、佐野地方は東山道の使道となっており、勅者、使者、蝦夷(えみし)征伐の武人らが東北地方へ下る通路となっていました。この使道の左側を左野と呼んでおり、この左側の野に人が住みついて佐野となったという説です。(道の右側を右野(うの)→上野→植野)

②狭野説

佐野地方は、万葉集東歌の「安蘇山」、「三毳山」、「赤見山」などに囲まれた狭い平野であり、この地形から狭野が転じて佐野となったという説です。

③麻野説

安蘇郡は、平安中期(10世紀頃)の「倭名類聚抄」(わみょうるいじゅうしゅう)によると、麻読(おみ)郷(田沼・赤見)、説多(せった)郷(葛生)、安蘇(あそ)郷(佐野・犬伏・旗川)、意部(おふ)郷(植野・界)の4郷に分かれていましたが、この中心の安蘇郷は、安蘇野が転じて麻野といわれ「あさの」の「あ」を除いて「佐野」となったという説です。

【安蘇】

安蘇は麻緒(アサオ)の略かもしれません。麻を産するため、この名前があると和名抄は解しています。下野国志にも安蘇の名前は麻より出でしとあり、現に馬門に麻田明神があります。

【田沼】

田沼とは水田や池沼のあったところ。現在の愛宕山のふもとには古くから小さい沼や狭い水田があったであろう。これが珍しかったので、能忍地(のうねんじ)から本町にかけて最初の集落が発生し、付近一帯を田沼と呼ぶようになったという説です。

【葛生】

① 万葉集の東歌の中に「上毛野安蘇山黒葛野(かみつけぬあそやまつづらぬ)を広み延(は)ひにしものを何(あぜ)か絶えせむ」とあります。ここに上毛野とあるのは、上古は今の上野と下野は毛野国といって一国であったが、仁徳天皇のころ上毛野と下毛野に分けられました。しかし、境界は一般には不分明であったため、誰の作ともわからず東国人の歌として万葉集に採録するとき、筆者がはっきり境界など気にせず下毛野を上毛野と書いたようにも考えられます。

この歌の「つづら」は葛または藤など、つるを利用してひものように利用できる植物を意味しているので、「葛生の地名」の起こりもこの辺から出たのではないかとされています。

② クズ・フという地名で、クズは動詞クズレル(崩れる)の語幹で、山・崖などが崩れ落ちるの意味から、崩崖・崩壊地をいいます。フは「～になっている所」という地形名彙の語尾につくものなので、地名は崩崖地に由来するという説です。

【旗川】 次は、地区名ではなく、川としての旗川のいわれ

下毛の押頭使、田原藤太藤原秀郷朝臣の後裔で、佐野宗綱が天正年間に足利頭長と戦った時、川の東岸に陣したが、洪水に際し川を渡れず、将士を励まして、一と流の旗を激流に投じ、川を渉らしめたことにより、旗川と称すという言い伝えがあります。

【吾妻】

吾妻の名称は顕著な理由はないようですが、新村組織の際、上官からの命令は羽田と称したが、村上・高橋から異議がありました。合議のうえ、村上の小堀貞次郎氏の考案によるもの。昔、この辺を佐野の庄吾妻の里と称したことがあったことにより、吾妻を採用したとのこと。「東」としようとした者もあったようです。

【界】

界の名称は、上野国（群馬県）との境目にあることから付けられたものであろう。

【旧三好村】

旧岩崎村、旧船越村及び旧戸室村の3村が合併して、三好村ができました。三好とは、3村が仲よくしようという意味です。

【旧野上村】

旧作原村、旧白岩村、旧長谷場村及び旧御神楽村の4村を合併して、野上村が作られました。昔からこの地方を野上郷と呼んでいたもので、これをとって名づけたものと考えられます。しかし、なぜ野上といったのかは不明です。

【旧新合村】

旧山形村、旧梅園村、旧閑馬村及び旧下彦間村を合わせて、新合村が作られました。シンゴウとは新しく村を合わせたという意味です。

【旧常盤村】

常盤村の名称は、町村施行当時の関係町村、すなわち、豊代（とよしろ）の「と」、牧（まき）の「き」、仙波（せんば）の「は」をそれぞれとって、ときわ（常盤）村としたと伝えられています。

2. 町会名〈五十音順〉

【相生町(葛生、佐野)】

全国に多く分布する町会名ですが、その由来については不明です。

【会沢第一、会沢第二、会沢第三】

会沢村は明治21年に葛生と合併し葛生町となりました。また、それ以前に、もと都賀郡小曾戸村、小室村が明治9年4月に合併し会沢村となりました。昔から安蘇郡佐野の庄でありましたが、元禄4年(1691)より186年間都賀郡に属し、明治9年11月、安蘇郡に復帰しました。小室村は一小村落で、小曾戸村と境を接し錯雑するので、便宜合併して今の会沢村と改称したということです。

【赤坂町】

不明

【赤見町(市場、駒場、大門、町屋)】

① 赤見とは、足利時代末期に赤見伊賀守がこの地に城を築き赤見城と呼んでいましたが、永禄年中佐野氏に攻略されたこともあり、且つ赤見六郎の墓などあるところから、赤見の村名が起きたものと思われます。

② 一説では、当時の領主が山頂から眺めたところ、紅葉を見て賞詠し、その後、村名を赤見と名づけたとの伝説があります。

・赤見町(市場)

「市」は、一般に物資交換の方便としての交易場所をいい、「市場」ともいいます。「市」は古代の昔から各地で開かれ、特に中世以降になると寺社の祭礼などで「市」が立ち、近世の城下では日を定めて定期的に開かれました。「市」、「市場」の地名が残っているのは意外に少ないようです。

・赤見町(駒場)

不明。地域住民は国道293号のすぐ南側を「ばんば(馬場?)」と呼んでいます。付近にも「馬」に因んだ地名が多いことから、昔この地域に馬が生息していたことに由来するのかも知れません。

・赤見町(大門)

唐沢山城の出城が近くにあり、大きな門(大門)があったところから、大門の名前がついたのではないかと思います。

・赤見町(町屋)

赤見城の城下町として商家の家々があったところから、町屋の名前がついたのではないかと思います。

【浅沼町】

① 現在の相生町に、昔、大きな池があったと言われており、その沼を「安蘇沼」といい、その沼の名をとって「浅沼町」となったと言われています。

② 浅沼は、昔、阿曾沼があった地で、阿曾沼四郎廣綱という剛勇の居城もありました。阿曾沼転じて浅沼となったと言われています。

【朝日町】

朝日町は、最初、現在の天神町全区域を含めて朝日町と呼んでいたもので、付近にある朝日森天満宮と、その境内に高くそびえていた老松や杉の森から毎朝太陽が昇るところから朝日町と名づけたといわれています。

【鑑塚町】

- ① 永禄2年方量のとき鑑塚村と称すなり。
- ② 伝承によると、建武2年（1335）に亡くなった尊雲法親王の首を埋めて塚としたのを、村民が尊んで阿武塚と呼んだのに由来するといわれています。
- ③ アブは、アバの転で動詞アバク（褫く）の語幹であり、崩壊するという意です。ヅカはツカで小高い丘、台地を意味します。鑑塚は三杉川の氾濫によって浸食を受けた崩壊地に由来する地名ではないかという説があります。

【飯田町】

由来は不明ですが、河川や地下水が豊富で米作りが盛んであり、良質な米ができたため、田にちなんだ町名となったのであろうといわれています。

【伊賀町】

昔の公図等を見ると、当時の小屋町に小字で伊賀という地名があります。春日岡城の周辺にはお城に仕えた武家達の屋敷があつて、伊賀に縁のある侍（小姓）が屋敷を構えていた辺りが、地名として現在の町名に結びついたと考えられます。

【石塚町(上、下、緑)】

- ① 石塚は旗川（旧野上川）と彦間川の合流地点の川下にあたり、両河川の奥地から運んで来た土石が、この地に堆積されたものです。この石の多い処から石塚と名づけられたとするのが妥当であるとされています。
- ② 元、牛塚村と称したこともありましたが、後に石塚村と改めたようですが、詳細は不明です。

【泉町】

不明

【出流原町】

- ① 昔は涌釜原と書いたともいわれている。イズルハラのイズは、イズミ（出水）、ルは漠然と場所を示し、ハラはヒロ（広）ヒラ（平）の意味で平坦地のことから、出流原は、湧水地の前に開けた平坦地に由来するという説です。
- ② 元禄年間、湧釜ヶ原郷といったことがありました。その後出流原村と改めたとされています。

【伊勢山町】

- ① 70～80年前、町内に住むある方が、伊勢神宮参りに行き、お札をもらってきました。それを町内にある山に祀ったので「伊勢山」となったのだらうともいわれています。

- ② 天保3年、犬伏宿の南の方で、宿の中央からおよそ3町あたりに、17戸を造立し、伊勢山と称しました。

【犬伏上町、犬伏下町、犬伏新町、犬伏中町】

- ① 古代大和時代にさかのぼって犬伏という地名があったといわれています。古老の話では大昔、この地に大猿が出て婦女子を餌食にするので、何とか防ぐ方法として年に1回の祭に娘を供養に出すことになってから被害は少なくなりましたが、年々娘たちが少なくなっても困るところから、近江国より、ちよっぺ太郎という大犬をつれてきました。娘の代わりに供養に出したところ犬と猿との戦いによって、両者死に絶えました。それからは人畜に全く被害がなくなりました。これも太郎のおかげであるとのことから、或る丘に犬を埋め供養したことから、犬が丘に伏せているということが伝わり、犬伏町というに至ったものと伝えられています。
- ② その昔、豊作を願い人身御供が行われていましたが、山伏が娘に代え、犬を神社に供えたことを境に人身御供がなくなりこの地を犬伏と称するようになったといわれています。
- ③ 犬伏では、その年の豊作と引き換えに八幡神社への人身御供物して、若い娘を差し出すことになっていました。ある年、山伏が娘の代わりに犬を神社へ置いたら、翌朝絶命しており、それから人身御供がなくなってこの土地を犬伏と称したといわれています。
- ④ 古来から、犬臥町または犬伏村と称したようですが一定していません。明和元年から日光例幣使道犬伏宿と称しました。
犬伏宿内を三分し、西から東に向かって、上、中、下の三丁としました。寛永13年、下町に接して戸数およそ70戸を設立し、新町と称しました。
- ⑤ イヌは低いという意味。名詞イ（寝）と助詞ヌ（寝）の複合語で、寝るの意から起こりました。ブシはフシの濁音化で、「節」の意と解されます。これは盛りあがったり、瘤（こぶ）のようになりつつある地勢のことです。したがって犬伏とは低い台地の起伏に富んだ地形に由来する地名という説です。

【伊保内町】

不明

【岩崎(葛生)】

町が県道秋山・万町線と県道仙波・鍋山線の交差点周辺に位置し、道路に挟まれた山（町の北西側）の先端が岩山になっているため、「岩山の先の町」から「岩崎」となったといわれています。

【岩崎(田沼)】

岩山が平地に突き出ているところが岩崎です。つまり崎は先端のことで、おそらく現在八幡宮のあるところが突き出ていることから起ったのであろうといわれています。

【植上町】

旧植野村大字植野のうち、字名新屋敷、高小路、北馬場（通称三小路）を植上町としたのが始まりといわれています。

【植下町】

不明

【植野町(泉、台南)】

奈良時代（8世紀頃）に、佐野地方は東山道の使道となっており、勅者、使者、蝦夷（えみし）征伐の武人らが東北地方へ下る通路となっていました。この使道の右側を右野（うの）と呼んでおり、上野→植野となったという説があります。

【梅園】

昔は梅曾根と書きました。ソネは石の多い瘦地（やせち）です。ウメは梅の字になっていますが、埋めかも知れないという説があります。

【大釜】

大釜には、小野久保という三方が山に囲まれた平地があります。ここに、石灰石がすり鉢状に立ち並び、釜のような形をした中央部分から湧き水がこんこんと流れ出て、ちょうど釜が煮え立っているようなので、大釜と名前が付いたそうです。

【大蔵町】

彦根藩井伊家の領地であった当時、現在の星宮神社前付近に毎年の年貢を入れる大きな蔵屋敷が並んでいたことからつけられたものだろう。（前町名：蔵之内）

【大栗町】

不明

【大古屋町】

地名の由来は分かりませんが、大古屋の集落は、現在地と船津川の間地である菊沢川沿岸にあったとのこと。その場所は、現在「もとごや」といわれています。元大古屋がなまったものともいわれています。

そこは低地で水害の影響があるため、現在の場所に引っ越したようです。

【大橋町(市街部、西部、東部)】

現在の県道桐生岩舟線と中橋の間にあった例幣使街道の秋山川に架かる大きい橋が由来とのこと。

【小見】

オミとは多水（おおみず）の意味で、川の流れる平地につけた地名です。この地は吉水に接する扇端湧水地で、稲作に適したので早くから開けたところと思われます。

【柿平】

カキはカケ（欠け）の転です。カケは動詞カケル（欠ける）の連用形の名詞化で、崩崖・崩壊地をいい、ダイラ（平）には山中にある平らなところとか、山の中腹から

麓の辺という意味があります。したがって、山崩れのあった崩壊地に由来する地名という説です。

【片倉】

不明

【角町】

不明

【金井上町】

金井上町は金澤町と金井町が合併して生まれたといわれています。

【金吹町】

昔、この近辺は鋳物の工業団地があり現在も「金」の付く地名が残っています。金吹は「金を吹いていた場所」(製造)からこの地名が付いたのではないかとされています。

【金屋下町】

1602年、幕府の山城禁止の命を受け、佐野信吉がその居城を唐沢山城から春日山に移築した際の城下町形成の計画において、居城予定地の風上にあたる北西に火を扱う鋳物師集落があったため、それを南側にあたる現在の地へ移住させました。

そのため、製鉄所・精錬所が集まっていたことから、現在の町名となったといわれています。

【金屋仲町】

戦前くらいに金屋町と金屋仲町が合わさって今の金屋仲町になったといわれています。

【庚申塚町】

- ① かのえづか、こうしんづか とも呼ばれていました。
- ② 古く60年、あるいは60日ごとにめぐってくる庚申(かのえさる)のときに、特殊な禁忌を求める信仰がありました。各地の路傍にみられる庚申供養灯や庚申塚は、この信仰の行事にともなう造立・築造によるものです。庚申供養灯や庚申塚が祀られたところが地名として今日に伝えられており、民間信仰の根強さを如実に示しているものです。

【上秋山】

アキはハキ・ハケ(剥)の転で、崩壊地形をいい、ヤマ(山)は山地そのものです。これにより、山崩れとか崩崖地に由来するものという説です。

【上作原】

- ① サクは狭いことで、ハラと合わせて狭小な平地を指しています。
- ② サク・ハラという地名ではなかろうか。サクには窪くて長く平らかな所とか、

山間地という意味があります。ハラは「開」の義で、開墾地の意に解されます。これによって、山間の開墾地に由来するものであろうという説があります。

【上仙波】

- ① 仙波地区の上（北）に位置するからではないかといわれています。
- ② センバは、セマ・バの転です。セマは動詞セマル（迫る、逼る）の語幹で、幅がせばまるの意です。バは単なる場所を示す語です。これによって、狭い谷間地に由来するものといえます。センバをセバ（狭）の撥音化と考えてもよい。

【上台町】

- ① 大正3年11月植野村村会での決議により創立されました。東武鉄道佐野町駅（停車場）の開通を受け、地域の発展を考えた地元有志が、当時「臺小路」と言われていた地域において、27軒をもって「上臺町」の創立を発起したとのことです。
- ② 昔、この地域は台小路と呼ばれ、東武線佐野線が開通された時、地元民の総意で、台小路の上手に位置していることから上台町となったものであるといわれています。

【上多田】

- ① 多田とは田が多いと書くが、古くは上多田に少し見られたのみであったろうから信じがたく、一般にはタダは鉄を溶かすのに使われるからタタラから来たものといわれています。
- ② タダは動詞タダル（爛る）の語幹で、荒れて崩れるの意から、秋山川の洪水によって浸食・崩壊した地に由来する地名のように思われるとの説があります。

【上町西、上町東】

昭和18年に「大東亜戦争」の空襲訓練のため、上町は上町東と上町西に分かれたそうです。その当時は全体で300棟位であったそうです。

【上羽田町】

室町時代頃、羽田郷から上・下に分かれたとのこと。

【上牧】

- ① 牧地区がその昔、放牧地であったためといわれています。
- ② マキはマクの転であろう。動詞マク（撒く）で、物を散らす・落とすとか、散らかけるの意から、山崩れなどの崩壊地に由来する地名ではないかという説があります。

【亀井町】

亀井町は、旧佐野町で中央に位置し、町名も当時は『仲町四丁目』と称していたこともあります。それが後に亀井町に改称し今日にいたったとのこと。

【瓦町】

昔は河川敷だったことから「川原」の意味だったようです。幕末頃より当地において瓦製造が行われるようになったため「瓦」の文字が当てられたと思われます。

【閑馬上、閑馬下】

- ① 源頼朝が平家との合戦にそなえ、軍馬を集めるため馬がりをした時、野生のすばらしい馬を2頭見つけ、1頭はすぐに捕えられましたが、もう1頭は走りつかれ池で水をのみ休んでいる所を捕えられました。馬が静かになったところで「閑馬」と呼ぶようになったといわれています。その2頭は、池月と磨墨と名付けられ軍馬として大活躍をしました。
- ② 昔は神馬とも書かれていましたが、どうやら馬とは関係がないようです。おそらくカノマから転化したか、カンマキのキが取れた形であろうと思われます。狩野(かの)、狩野蒔き(かのまき)は焼畑のことです。
- ③ カンマはカンマキの下略であろう。切替畑(きりかえはた。焼畑。)をカンマキというので、地名は焼畑に由来するものと思われます。

【君田町】

現在の海陸橋の下を川が流れており、良質の地下水が豊富であったことから、田んぼが広がり、米作りが盛んで、江戸に米を納めていたほどでした。堀田家の領地であった故に田にちなんだ町名となったといわれています。

【久保町】

久保町は、その昔、「小屋町」といわれ、明治9年に天明宿と一つになる際に再編され、称するようになりました。朝日森と星宮の祭礼の年番町の順番が1番だったことから、現在も佐野市の町名で1番目になっています。

【黒袴町】

- ① 古歌「世を治め 古麻を袴に ひきかえて 国も豊かに 民栄えけり」(意味：世は治まり、僧侶達が去り、股引き姿の農民が働くようになり、国は豊かに民も栄えております。) 寺社領であった黒袴の地を佐野基綱公が治めるようになりました。その象徴として墨染めの法衣(黒)と農民の作業服(袴)に因んで基綱公が名づけたといわれています。
- ② 黒袴にある天満宮の祭神菅原道真公が、黒い袴を着用していたことによるといわれています。
- ③ 古来黒袴の地で盛んであった窯業では、傾斜地に二条の畔(くろ)を立て素焼きの小物を作成していました。その焼く畔場の窯(くろばのかま)が転訛したものとされています。
- ④ 日光等へ向かう際に、この地で黒い袴にはき替えたことに由来するものといわれています。
- ⑤ クロは、畔、畦などから山の斜面を意味し、ハカマ(袴)は腰につけ下半身を覆うものであることから、三毳山の裾に開けた地に由来するものであるという説があります。

【越名町】

不明

【小中町(西、東)】

安蘇郡小中村は、往古より小中村と称すとのことです。

【小屋】

不明

【七軒町】

古老の話によると、元龜元年（1570）頃から普門院ほか六軒の農家が現地に在住していたところから、明治初年植野村七軒町と改名されたものです。また、安政（1854～1859）の頃は、西新屋敷と呼ばれていました。

【寺中町】

教育・文化など、お寺を中心に発展していった町であるので、寺中町になったのではないかとされています。

【下秋山】

上秋山参照

【下作原】

上作原参照

【下多田】

上多田参照

【下田沼】

佐野氏の祖・足利家綱の一族の田沼重綱がお寺と館を南に移し、ここを下田沼と称したといわれています。

【下町】

不明

【下羽田町】

上羽田町参照

【下彦間上、下彦間下】

① 寛永10年（1633）、井伊掃部頭（彦根藩）領となり、以後幕末まで彦根藩領。その際、旧村名「飛駒村」が「彦間村」と改められ、上、下、二村に分かれ、彦根の「彦」をあてたとされています。

- ② シモは上の対語、ヒコは男子の美称で、突き出た形を示す。マはやや広い地域を指す。要するに地形から作られた地名で、彦根藩の彦を取ったものでもなく、磨墨（スルスミ）、生月（イケヅキ）の名馬伝説とも関係がないのではという説があります。

【下牧】

上牧参照

【正雲寺】

不明

【白岩】

文字通り白い岩石のことで、葛生から伸びてきた石灰岩の層が、この付近で谷を横断しています。この石灰岩が露出して白く見えるので、名付けられたものといわれています。

【新吉水町北、新吉水町南】

- ① よい水が豊富に得られたということから、吉水という地名がついたようです。昭和50年区画整理事業の完成により、形成された町会で、水があちこちで湧水しており、また、付近に清水城があることからと思われます。
- ② 近世になり吉水郷の中の清水城付近は新吉水（始めは吉水新町）と改められました。

【関川町】

貞享3年（1686）、葦川橋から東に向かい、*大橋に至る往還に沿って、17戸を設置し、関川としたとのことです。（*大橋：犬伏宿の東、三杉川の下流にあり）

【大祝町】

70年頃前、大工町と祝町が一緒になって大祝町になりました。（佐野市史蹟編纂會刊「佐野市今昔町会めぐり」によると、昭和16年合併）

【大町】

不明

【高砂町】

不明

【高萩町】

タカ（高）には、高所の意のほかに、限度・限界を示す意味があります。この場合は台地の端部を示す地形です。ハギは動詞ハグ（剥ぐ）の連用形の名詞化で、崩壊地と解されます。これらのことから、高萩は河川の氾濫によって、台地の端部が崩壊または侵食された所に由来する地名と考えられという説があります。

【高橋町】

佐野の庄に中川（今の渡良瀬川）があり、船橋の架設があったことから船橋の里と称していました。これが訛って高橋となったという説があります。

【高山町】

その昔、当地開拓の中心人物であったのが「高山氏」であったため、高山と称したものであろう。

【田島町】

不明

【田名網】

不明

【田沼本町】

愛宕山の麓に田沼の最初の集落が発生したと言われており、そこからきた可能性があるとのことです。小字に「本宿」、「元屋敷」があるので、そこからきたかもしれません。

【田之入町】

不明

【築地】

不明

【寺久保町】

- ① 大字寺久保字般若に浄楽寺跡があり、建立当時は般若坊寺窪山浄楽寺と号していたことに由来する。
- ② テラはタイラ（平）の転で、山中の平坦地をいい、クボは窪んだ所とか周囲が高く中央が低くなっている所をいいます。したがって寺久保は山間の小さな平坦地に由来するものであるという説があります。

【天神町】

菅原道真公（天神）を祀る朝日森天満宮から由来するといわれています。

【天明町】

- ① 佐野の鋳物師（いもじ）はずっと昔から8月1日の八朔（はっさく）に宮中（天皇の住まい）へ燈籠（とうろう）を捧げるならわしになっていました。ちょうど近衛天皇の時代（1141～1155）に、天命家次（てんみょういえつぐ）という人が鉄の燈籠を捧げました。その燈籠の光は不思議にも天まで届き、人々を驚かせたそうです。そこで宮中の役人であった源頼政（みなもとのよりまさ）という人が、その立派な燈籠を捧げたことを祝って、家次に天をも明るくしたとい

う意味の「天明」という苗字をおくりました。天明という地名はここから起こったといわれています。また、天命の由来について、星の宮社託によれば、阿部晴明が天朝の命により、天の二十八宿に象り地をこの地に相し、星の宮慈恵大明神を祀り、これより天命宿と称したとのことです。

- ② 佐野の前名の天明の名をとってつけられたといわれています。
- ③ 昔、佐野町は天命村と小屋村の2村がありました。寛永10年（1633）中国太守井伊掃部頭領するに及び、天命を改め天明と称したとのことです。

【栃本上、栃本下】

栃本は栃の木付近の村で、おそらく栃の大木が人目を引いたのであろう。本来の栃本は現在のように広い地域ではなかったようで、記録には元和2年（1616）本多正純の所領になったとき、もとの根小屋を改めて栃本と称するようになったとあります。また、村内を一の通りから六の通りに分けたのも、この年の検地の時であろうといわれています。

【戸奈良西、戸奈良東】

- ① 戸奈良という地名は全国的に外にはない地名です。この地名は地形からの由来で、旗川と彦間川の合流点の扇状地帯で緩い傾斜地のことを意味しているといわれています。古くは鰻山城主戸奈良五郎宗綱の城（館）跡があります。また、足尾山塊の終わりであり関東平野の始まりの地で牧歌的雰囲気のある奥座敷のような情緒ある戸奈良町です。
- ② トは出入口を示し、ナラは穏やかな傾斜地のことです。この位置が彦間川の谷への出入口になっており、東北部の山地から西南にかけて緩傾斜になっています。

【富岡町(東部、南部、北部)】

- ① 由来は不明。富岡村から富岡町となり、古くから地名はあるようです。
- ② トミはトビ（飛び）の転ではなかろうか。トビは動詞トブの連用形で、山が崩れることをトブというので、崩壊または侵食地形と考えられます。オカは台地のことです。富岡には数条の開析谷がみられるので、崩壊または侵食した台地に由来する地名ではなかろうかという説があります。

【戸室】

- ① 文治2年6月、中宮亮戸矢子七郎有綱は戦場で射抜かれた眼を、自分で洗った程の武勇の士だと伝えられ、その泉は今なお御目戸と呼ばれています。目井戸の意味らしいです。後に有綱は石室に参籠し、馬の鞍に腰をかけて自害したといわれています。戸室は戸矢子の戸と石室の室をとったといわれています。
- ② トは出入り口のこと、ムロは地面を掘って深くなったところをいいます。ムロには竪穴住居説や古墳石室説、自然の洞穴説などがあって、簡単に決めがたいところです。また、ムラが転化したという説もあります。ムロのつく地名は全国に多く、近くに羽室、氷室があり、県北には板室、逃室などがあります。

【中】

- ① 以前、唐沢山城の出城「中村城」（現在は民家の一角にその一部が現存）があり、「中」はこの中村城からきているそうです。

- ② 元弘元辛未年（1331）、桓武平氏梶原の末裔中村刑部景春という人が都賀郡小葉郷から当地の字石原の下に移って居住し、佐野家に付属して居館を営み、子孫代々この地に住んだようです。このころより中村の呼称が起こったといわれています。

【中仙波】

上仙波参照

【仲町】

民家の少なかった一瓶塚付近に商業機能を持った集落が発生し、ここが旧田沼の中心部になっていったことから、仲町となったと思われます。

【並木町(小野茂木、大門、田中、中妻、花岡、堀之内)】

並木町の由来は、日光例幣使街道から安楽寺（並木町1185番地）へ向かう参道沿いに杉並木があったためと思われます。

- ・並木町(小野茂木)

小野集落と茂木集落で町会を構成したことによるこのことです。

- ・並木町(大門)

安楽寺から南に例幣使街道に至る一本道があり、その道が杉並木であったことから並木町となったのではないかとこのことです。杉並木の痕跡として、安楽寺仁王門の南に50m程残っています。昭和30年頃は、杉を切った切り株が残されていて並木道の名残がありました。大門については、安楽寺仁王門のことではないかといわれています。

- ・並木町(田中)

田中については江戸時代の地図に記載があります。

- ・並木町(中妻)

不明

- ・並木町(花岡)

花岡の由来は、かつての地名が変化して花岡になったと思われます。

- ・並木町(堀之内)

中世城館に関連する伝承もなく、その歴史的経緯は不明このことです。かつてはお堀があったといいますが、現在は、お堀の形跡はありません。

【奈良淵町】

- ① 町会では、下記2説あるこのことですが、なぜ「奈良淵」となったかは不明このことです。

(1) 并(並)ぶ淵(池)があったので、并淵といわれていた。

(2) 檜の木と淵(池)があったので、檜淵といわれていた。

- ② 佐野は早くから大和朝廷の支配下にあり、豊城入彦命の東征後、奈良別王は下野国造としてこの地を統治し、奈良淵の地名はこれに因んだものという説があります。

- ③ ナラは、動詞ナラス（均す）の語幹で緩傾斜地形をいい、ブチ（フチ）は秋山川のフチ（縁）を意味します。よって、秋山川の段丘端に由来するという説があります。

【西浦町】

- ① 江戸時代は安蘇郡でなく都賀郡に属し、古河藩領でした。陸続きの都賀郡側から見ればみかも山の裏側、水辺、入り江を意味する浦と、山の裏とが重なってニシウラとなったといわれています。
- ② 西浦村は、昔、上都賀郡中泉荘三轟の崎太田の郷と称しました。三轟山の西麓に沿って沼を擁することにより、弘和元年から西浦と称したとのこと。

【葦川町】

ニラは、ニタ、ニダ、ニラと転じ、ヌタ(沼処)と同義で、低湿地をいい、ガワは「側」で、近くとか傍らの意であろうとのこと。したがって低湿地の近くに開けた地に由来する地名であろうという説があります。

【長谷場】

- ① ハセは走ることで、バは文字どおり場所です。しかし、ハセベが転化したものかもしれない。『和名抄』には、下野国河内郡と芳賀郡とにこの郷名があり、丈部、杖部と書いています。ハセベは古代のころ、役所に勤めて公文書の使送に従事した人たちです。しかし、この場合は長谷川と同じく、流れの速い川のあるところか、近くに寄居という中世の城館跡があるので、侍たちが走り回ったところという意味かであろうと思われます。
- ② ハセバは、ハセ・バという地名で、ハセは動詞ハセル(挟る)の語幹で、挟むの意から、山地に挟まれた地形を意味します。バは場所を示す単なる接尾語で、山間の谷地形に由来するという説があります。

【原町】

不明

【飛駒1区、飛駒2区、飛駒3区】

- ① 飛駒地方に古くからある伝承では、「するすみ」「いけづき」という平家物語、宇治川の先陣争いに出てくる二頭の名馬を生んだのが、飛駒地方だといわれています。飛駒とは、飛ぶように走る馬の産地という意味です。
- ② 旧飛駒村は近世の上彦間村がそのまま1村になったので、大字に分かれていません。明治初年には下彦間や閑馬と連合して戸長役場を置きましたが、明治22年独立して飛駒村と称しました。行政上の理由から近世以後、上、中、下、入の4組に分かれていましたが、戦後は1区、2区、3区となり、4区の入組は昭和43年桐生市に合併しました。
- ③ ヒコマは、ヒコ・マという地名。ヒコは動詞ヒク(引く)の連体形の上代東国方言ヒコで、山裾や自然堤防などがひき連なった所をいいます。マは場所を示す接尾語と思われます。したがって、彦間川に沿ってひき連なった山裾または自然堤防に由来するものという説があります。

【富士町(上、下)】

不明

【富士見町】

公募により、中村富士（京路戸山、諏訪岳）がよく見える位置にあることからつけられたとのこと。

【船越北、船越南】

船越の「コシ」は「腰」の意で、旗川の東の山の腰に集落が並んでいます。その腰の部分が段丘になっているので、船の腰にたとえたとの説があります。ここには段丘を現わす台、丘、棚などの小字名が多くあります。

【船津川町】

- ① 4つの町会で構成しています(上坪、中砂、十二所、下坪)。渡良瀬川に終戦頃まで「渡し場」がありました。
- ② 古く舟戸川、船渡川とも書いているので、フナトガワがフナツガワに転じたと解されます。フナトはウナ(畝)・ト(処)で、自然堤防を意味します。あるいはクナ(曲)・ト(処)で曲がったところかもしれません。つまり、渡良瀬川の自然堤防上の地、あるいは同河川の曲流部辺に開けた地に由来するものという説があります。

【堀米町(安良町上、安良町下、内堀米、菊川、七区、朱雀、横手)】

- ① 景行天皇55年2月、豊城入彦命の孫、彦狭島王が東山道15カ国の都督に任命され、赴任の途中この地で亡くなられ、御遺体を葬った故に、村名を堀籠邑と称したとのこと。(遺体を堀り籠めたということ)永正3年3月、更に堀米と改めました。
- ② ホリは鑿(のみ)、穿、掘の意味で、抉りとられたような地形をいい、ゴメ(コメ)は動詞コム(込む)の連用形が接尾語化したものと解されます。つまり、水が入り込むとか、水びたしになるの意から、河川の氾濫によって浸食を受けた地に由来する地名だという説があります。

・堀米町(安良町上)

不明

・堀米町(安良町下)

不明

・堀米町(内堀米)

不明

・堀米町(菊川)

比較的新しい集落で、200年程前、外の集落から新しくやってきた人が住みつき、「新家」近くに川があることから「新川」転じ、「菊川」となったといわれています。

・堀米町(七区)

堀米町(まち)にできた七番目の町会であるからといわれています。ただし、他町会には1区から6区までの割り当てはなく、七区のみ存在します。

・堀米町(朱雀)

不明

・堀米町(横手)

不明

【本町(葛生)】

不明

【本町(佐野)】

旧佐野町の中央部であることから「本町」と名付けられました。大通りに面して金融機関が集まり、老舗の商店が多く、医院も軒を並べ中心部にふさわしい形態を整えています。

【馬門町】

一般に湖の出口をマカドというので、越前沼の出口に由来する地名といわれています。しかし、馬門という地名は、湖に関係のない茂木町にもあります。よって、マカド(馬門)はマカ(曲)・ド(処)という地名であり、旧秋山川の曲がった所に由来するものという説があります。

【町谷町】

寛政9年、犬伏の東端の地に15戸を建設し、町谷としたとのこと。

【松井町】

不明

【御神楽】

- ① カグラは神社に奉納する神楽ではなくて、断崖のことをいいます。現地には宇都宮神社付近をはじめとして、いくつかの崖があります。上にミをつけたのは、その崖に神が宿るものと考えたからでしょう。近くに内神楽という地名もあります。
- ② ミカグラは、ミ(接頭語)・カグラという地名ではなかろうか。カグはカクの濁音化で、「欠」から崖などの崩壊地を意味し、ラはおおよその場所を示す接尾語と思われます。つまり、旗川の崩壊地に由来するものという説があります。

【水木】

付近の地勢から考えると、ミ(接頭語)・ズキという地名ではなかろうか。ズキはスキの濁音化で、動詞スキ(剥き)の連用形から、薄く切り取られた状態を意味します。したがって、秋山川の洪水によって浸食された崩崖・崩壊地に由来するものという説があります。

【宮本町】

不明

【村上町】

- ① 明治22年4月1日、村制施行により村上村、上羽田村、下羽田村、高橋村が合併し吾妻村(足利郡)となりました。昭和30年1月1日、佐野市へ編入しました。

- ② 村上村は、元上羽田村と称しました。今の上羽田村（町）を中羽田村と称し、今の下羽田村（町）を併せて、上中下羽田村と称しました。今の村上村（町）と改めたのは、3村の上に有るをもって、村上村（町）と称したものとされています。

【免鳥町(市街道、新田、免鳥)】

- ① 昔、佐野庄面鳥郷と称しましたが、その後、面鳥城主の高瀬紀伊守に一族で、右衛門亮胤行なるものがいました。佐野家から妻を娶ったことから、妻取村と改め、寛文年間から更に免鳥村と称したといわれています。
- ② 現在の免鳥町あたりには、唐沢山城の砦ともいべき出城（でじろ）がありました。この城主はいつも唐沢本城の城主のことをよく聞いて仕事をしていたので、本城の姫を嫁にすることになりました。
この嫁入りがとても盛大でにぎやかだったので、その後この地方を「娶り（めとり＝嫁を迎えること）」と呼ぶようになり、これが後になって「免鳥」の地名になったといわれています。
- ③ 「面取」という地形か、メ・トリに由来するものでしょう。面取とは部材の角を取ることに由来し、河川の浸食によって崩壊した地形と解されます。また、メ・トリのメ（目）は二つの接点・境目を意味し、トリ（取り）は動詞トル（取る）の連用形の名詞化で、切り取られたような地形と解されます。いずれにしても、河川の浸食によって、微高地の端部が崩壊したことによる地名という説があります。

・免鳥町(市街道)

この町会は、日光例幣使街道が本市に入り最初の町会であり、街道沿いに「市」が立ったことから市街道の町名となったといわれています。

・免鳥町(新田)

不明

・免鳥町(免鳥)

不明

【茂呂山町】

- ① 昭和18年の合併で旧界村が佐野市になり、馬門町となりました。その後、昭和52年の区画整理によって茂呂山町となりました。茂呂山町の辺りに茂呂山神社と呼ばれるものがかつてあり、旧界村の頃は現茂呂山町辺りを西茂呂地区と呼んでいました。恐らく茂呂山神社が町会名の出所だと考えられるとのこと。
- ② 茂呂山があることによってつけられたといわれています。

【山形】

- ① やまがたは山の方にあることを示し、カタは方であって、町方、里方、村方などのカタと同じです。
- ② ヤマガタのガタは、カタの濁音化で、動詞カタグ（傾ぐ）の語幹から、斜面を意味します。したがって、三床山の斜面麓に開けた地に由来するものではないかという説があります。

【山越】

山越のコシは腰のことで、山の腰の部分に集落が並んでいるからです。この集落は

後ろに山を負い、前に水田が開け、日当たりもよく用水にも恵まれて、早くより開けたらしく、裏山には多くの古墳が並んでいます。

【山菅】

不明

【大和町】

旧江戸町と旧福富町が合併して、大和町となりました。町名の由来は、地元で武運の誉れ高い藤原秀郷公ゆかりの月読神社三日月唐沢不動尊を御本尊とする三日月神社があり、それを敬い「大和」という名をつけたといわれています。

【倭町】

不明

【吉水】

- ① 湧水に恵まれた地、地内に豊富な清水が湧き出ている場所が、4ヶ所であることから、四清水（よしみず）と書いていました。
- ② 吉水とは良い水が豊富に得られるところです。吉水という地名は、鎌倉時代の弘安3年（1280）の古文書に見えて、佐野氏一族の支配地になっていました。

【吉水新田】

- ① 吉水新田の成立は貞享2年（1685）12月。彦根藩佐野陣屋から吉水村に、新田の普請を仰せ付けられ、貞享3年に集落が立ちました。
- ② 近世になると吉水郷の中の清水城付近は新吉水（始めは吉水新町）と改められ、また秋山川の河川敷を開いて、貞享2年（1685）吉水新田が作られました。

【米山町】

関川町のうち米山市営住宅団地の町会です。

【米山南町】

米山の南の位置にあたることからつけられました。

【万町(葛生)】

不明

【万町(佐野)】

不明ですが、日光例幣使街道の宿場街として栄えたことから「万（よろず）のものが集まる場所」との見方もあり、歴史のある商店が多いのも特徴です。

【若松町(城西、城東、城南)】

不明

【若松町(第一協和会)】

若松町は大きいのでそれを4つに分割したうちのひとつが、「第一共和」とのことです。

【若宮上町、若宮下町】

- ① 昭和48～53年にかけて区画整理が行われ、植下町から独立しました。その際に字名であった「若宮」の名称を使い、それぞれ「若宮上町」「若宮下町」としました。また、「若宮」の由来は、「大塔宮護良親王の若宮伝説」によると、親王と后との間に産まれた王子が若宮と呼ばれ、この地で生まれ育ったことから若宮と呼ばれるようになったとの伝説があります。
- ② 若宮上町は、小字の若宮のうち、上の部分にあたることから、また、若宮下町は小字の若宮のうち、下の部分にあたることからつけられました。

【参考文献等】

佐野町郷土誌

安蘇郡史（江森泰吉監修）

田沼町史

葛生町誌

とちぎの地名 語源から由来を探る（塙静夫著 落合書店刊）

とちぎの地名を探る（随想舎刊）

小中村史蹟（昭和8年発行）

吾妻村郷土誌（明治44年）

界村郷土誌

栃木県市町村誌（栃木県市町村誌刊行会刊）

安蘇郡赤見村 郷土地誌

安蘇郡犬伏町郷土誌（大正6年刊）

佐野市今昔町会めぐり（佐野市史蹟編纂會刊）

佐野市史資料 地誌編集材料取調書

「史談」会報21号（安蘇史談会刊）

犬伏町地誌（明治21年 小林彦一郎書）

佐野伝説民話集 犬伏のいわれ

下野伝説集あの山この里

佐野市史

小中村史蹟（昭和8年発行）

角川日本地名大辞典（角川書店刊）

旗川村郷土誌（明治44年編纂）

下野の伝説（尾島利雄著）

大塔宮子孫伝説秘話（上岡一雄著）

上臺町創立記念碑